

〔研究ノート〕

震災救援の最前線に立った中学生たち（その3）

—— 1925年北但震災における旧制豊岡中学生たちの
救援奉仕活動の作文記録を発掘して ——

編 著 者 深井 純一*

共同編集者 岸田 秀樹**

本稿は北但震災時における旧制豊岡中学校生徒による救援奉仕活動の記録作文の紹介第三弾である。この連載の意義は、第一に阪神淡路大震災との比較研究のために、中小規模のコミュニティにおける地震被害、震災救援奉仕活動、復興についての情報を提供すること、第二に青年期にある生徒たちの、被災者救出をも含めた、自発的な救援奉仕活動についての研究に寄与することである。

キーワード：北但震災，救援奉仕活動，旧制豊岡中学校生徒の作文記録，豊岡町被災地図，城崎郡の被害のあらまし

行 動 と 日 誌

小 幡 駿 吉

一，地震後解散してから町内を一巡したが，火事になる模様もなかった上に，村の家も心配になったから，直ちに鉄道伝いに帰村。3時ころ城崎町を訪ねた。既に火事は大方止んで，ただ煙のみモウモウとしていた。悲惨。^{せいさん}凄惨。帰宅して野宿。

二，24日 朝早く豊岡に来て驚いた。登校し

て校門の所に控えた。この夜寄宿舎に泊まった。

25日 同じく校門に控えた。

26日 一たん帰宅した。

27日 豊岡に來り登校，校門に控えた。
立野に野宿。

28・29日 小学校に控えた。

30日 豊岡中学校地震研究班の一員として，城崎・港村方面を撮影して回った。

31日 終日家にいて眠った。

三，わが校生徒のこの際における行動は，それ相応の働きであり，非難・称賛ともにあるべきでない。以上。

行 動 と 日 誌

片 岡 壽 美 夫

一，鉄道の線路を伝って午後2時に城崎に帰り，城崎の入口で火が収まるまで待ち，4時に山を三つ越して家に帰った。時はちょうど5時20分，わが家はもはや焼け落ちていた。夜は野宿した。

二，24・26日 家事。

26日 午前は小包配達をした。

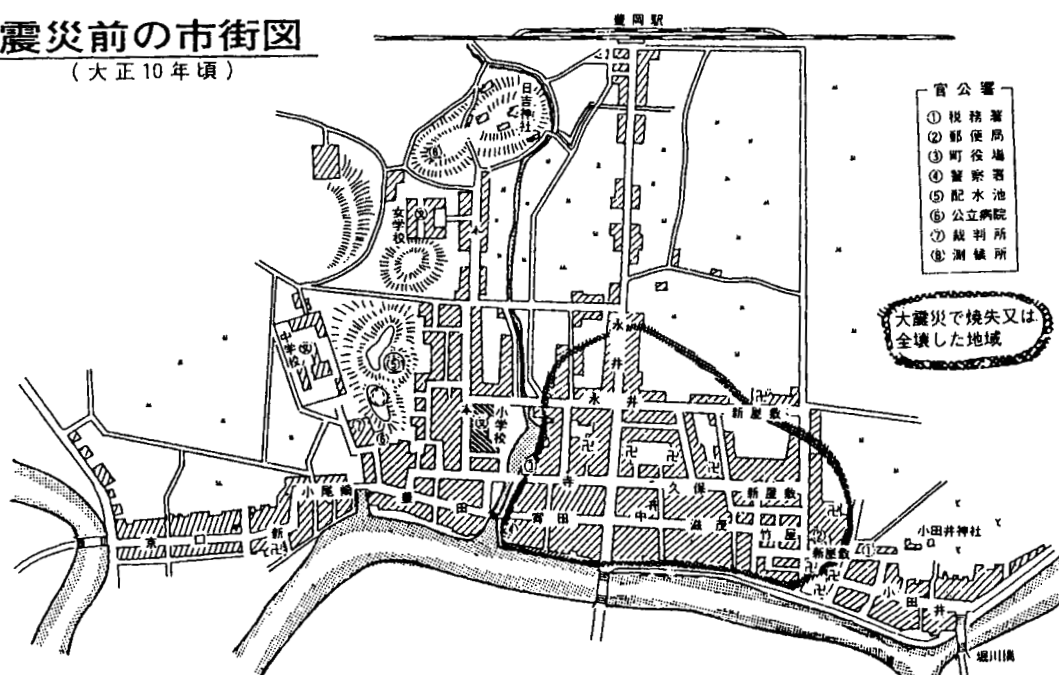
27日 配給品を運送した。午後4時より

* 立命館大学産業社会学部教授

** 立命館大学非常勤講師

震災前の市街図

（大正10年頃）



豊岡町被災地図 出典：『広報とよおか』1997.5.1 p.6

負傷者約15人を自分1人で看護した。

28日 朝、家の用事をして昼から配給品の配布。午後6時より病人約10人を看護。

29日 午前10時～午後5時 慰問品配布。

午後6時より負傷者約8人を看護。

30日 1日中配給品を配布した。

31日 午後5時まで配布に努め、午後6時より約15人の負傷者を看護。

三、2年生では、城崎で片岡平太・片岡眞一君は、毎日郵便局の小包あるいは郵便を配達した。

3年生では、城崎で澤田秀雄君は、天理教教師とともに救護班に加わり、大いに活躍した。

感想と覚悟 片岡 寿美夫

関東の大震災の余波が未だ収まらないうちに、わが但馬にも震災が襲って来た。我々は関東震災について、新聞あるいは雑誌で知識を得

ていたが、初めて震災〔を体験し〕、驚きを感じ校外に飛び出した。その時はほとんど無意識であった。

我々はこの「無意識に飛び出した」と言うことが甚だ遺憾でたまらない。これが果たしてわが豊中の和魂男児であろうか。何ゆえにもっと秩序を立てて出なかったか、また何ゆえにより以上に落ち着かなかったのか。しかも指導者が真っ先に飛び出た。もし不幸にもわが中学校が倒れたとすれば、死人・負傷者が何百人あったであろうか。そして世間の人はどのような批評をしたであろうか。これを考えると我々の責任は最も重く、また指導者はもっと〔職務に〕忠実で、勇敢でありたい。

それ故に我々は今後震災ばかりでなく、どのようなこと、あるいはどのような精神の打撃に対しても、忠実・勇敢でありたいのである。この精神をもって復興に努めたならば、わが但馬

は大シティになり、それによって世間の人々の色々の同情に対する、一大恩返しになるのではなからうか。

行 動 と 日 誌

河 本 隆

一、地震が起こって全校生徒が運動場で授業中止を知らされ、各々自分の家に帰ったが、被害が大きくなかったためまた豊岡に出て、本町の下敷きになっている人を助ける手伝いを少し行ない、西岡君の家を片付け、赤江の家の家具を運んだ。夜、足が痛くて歩くことが出来ず、女学校に行き、おむすびをつくって運んだ。夜、少しも寝なかった。

二、24日 僕の家を少し片付け、赤江の家の家具を運ぶのを手伝い、その後中学校に来て〔被災者の〕家族捜しをした。

25日 登校して色々とお手伝いをした。

26日 豊岡に出た。

27日 僕の家において家具を片付けた。

28日 豊岡に出た。

29・30日 僕の家に行った。

31日 豊岡に出た。

三、23日に豊岡に出た時に、家の下敷きになっている人を助け出していた中学生が、5年組に大分いた。その後皆一生懸命に他の家の家具を出していた。また被災者のバラックの材木などを運んだり、また夜ろうそくを避難民に与えるなど、非常によく働いた。

感 想 と 覚 悟

河 本 隆

但馬一の都・豊岡が今回の震災により、一瞬のうちに焼け野に一変し、僕は夢のように今更ながら大自然の力の偉大なことと、人間の無力と科学の未発達とを感じないではいられない。

但馬の人々はまだ震災に出遭ったことはなかったのではあるが、続々と来る余震に心を悩ま

され、また雷のような地震の先触れと自動車の爆音とを、間違っではヒヤリとするほど、人々は神経過敏になっている。

僕は、今回の但馬の震災を経験して、今まで聞いていた東京の震災が万事において大きいだけに、どんなに悲惨であったかを初めて想像することが出来た。

しかし但馬もこの震災で地層も固定し、多くの人の同情に感謝し、今はもはや数日前の恐ろしい震災を思い出してはむやみに嘆いたりせず、但馬第一の豊岡を以前より一層華やかに充実した町、否、市にしようと復興に努力しなければならない。但馬の人々の目先にある最大任務はただ復興にあるのみ。僕らもこの恐ろしい震災を被った但馬人の1人として、自重して復興に努力しよう。

行 動 と 日 誌

児 島 久 兵 衛

註 震災時の作文ではいずれも「児島正」であるが、『卒業生名簿』に従った。

一、大地震後、徳田先生外4・5名と豊岡町を巡視した。駅通りの被害の甚大なことは実に言う言葉がなかった。倒壊した家屋から救いを求める声、火事・煙・色々な声、無残に押しつぶされた生々しい死体を運ぶ中学生などなど、余りのことにぼうぜんとするしかなかった。

ようやく駅通りを通り抜けて、駅前の広場に出た時だった。今やっと豊岡に着いたばかりの11人の女の人が、オロオロ声で自分たちの町の状況を私たちに聞いた。極度の恐怖と焦りのために、青ざめている顔色を見ては、泣き出さずにはいられなかった。実にその時初めて涙が出たのだ。

中学校に帰ると、はや多くの避難民が中学校運動場に押し寄せていた。……それから何をし

たかちょっと今思い出せない……とにかくしばらく時間が過ぎた。

恐ろしさに震えていながら、しかも恐ろしいもの見たさの好奇心が、私を町まで引っ張り出した。そして恐ろしい、実に毒々しい、炎の色を今でもはっきりと思い出すことが出来る。何というのろわしい炎だったか。

そこで先生の荷物を立野^{たちの}に大分運んだことを覚えている。その間、炎は炎々と次から次へと燃え移っていた。人々はただ消し止めることも知らずに、ぼうぜんと炎を見つめているのみだった。

かなり時間が流れた。僕はいつの間にか豊田町の端で、宵田^{よいた}町の端をなめている炎を見ている人間の中に交じっていた。ただ恐ろしさで心がいっぱいだった。その夜、寄宿舎前の広場で寒々とした空を見つめながら、またしても燃え盛る火の手に脅かされながら寝たのだ。

二、24日 朝8時の汽車で帰った。

25日 大分〔多くの人が〕見舞いにきた。あんまり周囲が穏やか過ぎて何もすることがなく、豊岡のことを思うと何だか済まないような、じっとしておれないような気持ちに襲われ出して、家の者が止めるのも聞かずに、3時の汽車で豊岡に戻った。

それから色々な仕事をした。もちろん小さいことばかりで実に心苦しい次第だが。

近いうち詳しいことは何かの機会に書こうと思うが、今は思い出せないから、落ち着いた日を待つのみだ。

感想と覚悟

兒島 久兵衛

突如起こった大震に脅かされて校舎を飛び出した時、地震に遭遇した経験のない私にとって（否、それは単に私1人でなかろうと思う）あれほど被害が甚大であろうとはどうして思えた

だろう。であるからいったん学校を出て、被害の余りにも激甚である実情を目の当たりにしては、実にぼうぜんとするしかなかった。平安の夢は根底から覆されてしまったのである。

死が渦を巻いている。町の上には恐怖と不安と震えの大きなヴェールが覆いかぶさっていたのである。わずかあれだけの自然の変動が、我々人間の生活の上に及ぼす影響は本当に底知れないほどである。

嘗々として人間が築き上げて来た文化の高塔も、この超人的な力の発動の前には実に幻のようにはかない。気まぐれな自然は時々思い出したように、その絶大な威力を人間に示し、こうささやくような気がする。

——「汝^{なんじ}弱き者人間よ、汝^{なんじ}はこのように小さく、このようにか弱い。もっと大きく、もっと高く、もっと広く、もっと力強くあれ！」と……。

暴虐^かな魔の手に掻きむしられた無惨な廃墟に、我々はむやみに涙を注ぐことを止めよう。そして今まさに門出しようとする戦士のごとき勇ましい心に立ち返って、この吹き荒らされた騒乱の跡を開拓する聖なる労働の第一歩を踏み出そう。

人間の大きな相互愛の連鎖の中に、温かい人間の血潮を感じ、希望に満ち、感激にあふれた人生の大道を雄々しく歩んで行こう。

行動と日誌

衣川 純三

一、運動場における校長の訓辞後、直ちに包帯1巻・傷薬1瓶を携帯して、本町にある保証人・日下部康太郎氏の宅に急行した。しかし家は既に道路に投げ出され、屋内の様子が不明のため裏に回り、垣を破って屋内に辛うじて入り、氏の名前を大声で呼び回ったが返事なし。

それ故に付近の避難者に尋ねたところ、ただ一家は皆無事であることが分かったのみで、どこにどうして逃げられたのかが少しも分からず、小学校校庭あるいは駅通り、寿公園方面を探索したが、ついに発見できなかった。

そこで火の手が上がっている郵便局に駆けつけ、「自分は大屋郵便局に関係ある者だ。安心して、また労をいとわず仕事を命じよ」とどなりつけ、目の前に放棄してあった行囊〔^{こうのう}＝郵袋^{ゆうたい}の旧称。郵便物輸送のための袋〕から書留書類・小為替・日計表などを集めて担ぎ出し、一まず公園内に避難した。

次に引き返して電話室内に入り、電話機数個、テーブル5個を車に乗せて引き出した。そして局からは一度引き取り、寺町方面に回り、姓名は不明だったが一老婆を背負って避難し、神武山に逃げた。その後本町方面が危険なため、校長・河合両先生の家財を運び出した。

二、24日 学校内の整理を一応して、焼け跡の片付けに出た。午後父が迎えに来られたため、徒歩で故郷に出発した。

25日・30日 6日間で英語コンパニオンリーダー1冊、英文解釈の残りを済ませた。

31日 午後帰校し、先生の荷物を宅に戻すのを手伝った。

三、徳田大尉先生が沈着であることに非常に感心して奮い立った。すなわち火は既に住宅に迫り、夫人は家財の整理をせき立てられるにもかかわらず、先生は悠々としてポンプを用い、消火に努力され、もはや危険になると、大事なサーベル〔西洋風の軍刀〕を舟で運び出し、その後避難された。実に将来の我らの教師としてありがたいことである。

感想と覚悟

衣川 純三

地震博士の名で広く天下を従わせ、名声が口々に言いはやされた大森博士は、かつて城崎温泉において、「この但馬地方は地震に対し、安全地帯の上のなお安全地帯である」と言った。その他の大学者も、もちろんこれには何らの異議を挟まなかった。

それなのに何ということか、突如として北但・豊岡方面を襲った大震災は、数秒経たぬうちに家屋を倒壊させ、道路を破壊し、各所における火の手は真つ赤な炎をかきたてて、連日の晴天に乾き切った家々をなめ尽くしてしまった。老幼婦女の泣き叫ぶ悲鳴、家屋の下敷きになって救いを求める人の声、実にむごたらしいこと極まりなかった。

時は既に数時間を経たのにまだ〔火事が〕鎮まらず、焼け尽くした跡を見れば、今の今までこの太平の夢を見ていた豊岡町も、ただ燃え残りがくすぶる焦土と化してしまった。思えば人力の心細さよ！自然の力の偉大さよ！

万物の霊長と誇った人類は、日進月歩の文明にかぶれ、文明を夢見ていたのだ。自分はこの度の大地震に対し、この自然力の偉大さに比較すれば、この文明の世の人力もごみくずの薄片にも値しないと深く心にとめた。

我らは絶対に自然に打ち勝つということは困難、と言うよりむしろ不可能なことと思う。そうであれば今後の我らの取るべき道は何だろうか。不可能なことをむやみに最後までなしとげようとするのは、かえって無益なことであるから、我々は適切に奮い、励み、人力の及ぶ限りを尽くして自然に抗すべきである。そのような時は、関東の大震災にせよ、この度の大地震にせよ、その損害を半減することは容易なことと思う。

それ故に我々は天皇のお気持ちの趣旨をよく含み、むやみに平和を夢みず文明にかぶれず、落ち着きがなく軽はずみな傾向を一掃し、この地球上の闘争に対するとともに、自然〔災害〕に備えるべきであると思う。

行 動 と 日 誌

齋 藤 精

一、自分の家の取り片付けをし、原籍地〔＝故郷〕の親類までこれ（その荷物）を送り、その後学校に行った。

二、主に学校にいた。28日には原籍地まで教科書を取りに行き、29日豊岡に戻った。

三、寄宿舎生徒のよく働いたこと（23日）。

感 想 と 覚 悟

齋 藤 忠

初夏の気分に満たされたうらかな日光が、そことなくこことなく、すべての物に照り輝いていた日だった。突如として鳴動する何物かのために、人類すべてが安心不動の所と考えていた大地は無雑作に震動した。

そして強固・優美をそのモットーとして勝ち誇っていた大建築物も、一大旧家〔の構え〕をそのエクサベーション〔＝公開作品〕として全町に鳴り響いていた大家も、あれと言わずこれと言わず、震災の渦中に落とされた。

あるいは倒れ、あるいは傾き、実に悲痛極まる大事件であった。その倒れる瞬間、はや天には数条の黒煙が、知らないうちに空に上がっていた。警察の警鐘は乱打され、各区の消防夫の集合もあった。

家族の者はこの激震に、1人として家屋外に〔出て〕いない者はなかった。彼らは皆顔が青ざめていた。自分が自宅に帰った時、その前に1軒の家屋が横たわっていた。しかしそれは自宅ではなかった。

早速家の人の安否について色々と尋ねた。先に煙突の煙のようであった数条の黒煙は、知らず知らずの間に赤い赤い火の柱となっていた。そして荒れ狂う強風のために、各所からの消防夫の力も及ばず、火柱はますます広がった。そして大〔都会と〕誇った豊岡の町も、一朝にして煙と化し灰と化し、見るも悲惨な状態であった。

そして24日にはこの興隆の2字を飾りつつある豊岡も、「隆」の1字を灰と化し、新たに加わる「復」の字によって支配された。そして各所に今や復興の気運は満ち満ちて、我々が修学旅行において見た時のような、トタン張りや板張りの屋根の家がそこかしこに現われ始めた。

我々はこの際に当たって、多くの地方から同情を被っているのである。この他所からの同情に対しての恩返しは何であろう。それは言うまでもなく「復興」である。

この時こそ我々はこの豊岡の怠惰なる精神を一転させ、またこの豊岡中学の旧来の精神を一転させて、われわれが多年希望してきた「ある希望」の道へと猛進せねばならない。そしてこの豊岡中学校を、物質でなくして精神の上に復興させなければならない。

行 動 と 日 誌

笹 山 清 右 衛 門

一、地震が起こってから直ちに机の下に隠れた。机が悪く隠れにくかった。運動場より解散後、下宿屋に直ちに帰った。下宿は少し傾いていた。午後、家屋焼失の憂いあるにより、荷物を全部出す。そして駅通りの家の荷物出しを手伝った。晩は一睡もせず小学校庭に野営した。

二、24日 朝から郷里のことが心配になった。

僕の荷物は内山克孝君が寄宿舎に預けた

と言うので、内山君を捜したが見当らなかった。午後6時半発の下り列車で帰省、僕の家は地震はどこ?というような様である。

25日 以後、別に記入にすべきことなし。
三、僕は余り感じたことはないが、僕の同級生諸君の家の荷物出しを手伝っている河本・山田彦三・上倉君の姿を見た。

四、僕は「地震が起こったら慌てるな」という格言を得た。第一震が済むのを待って直ちに屋内の火を消すことなどである。

感想と覚悟 笹山 清右衛門

「ドドドッ」という〔音がする〕と、もう豊岡・城崎の家はつぶれていたようだ。僕は豊岡・城崎の家々の耐震的設備の貧弱さには驚いた。これは1300年間、但馬地方には地震らしい地震がなかったことにもよるが、家の弱さも想像することが出来る。

僕らが校庭において解散をした時分、僕は家の倒壊したものもわずかだと思ったが、女坂を越えると4年荻原君の家が盛んに燃えていたので、僕は少なからず驚いた。

駅の方に行ってみると、大変な倒壊である。老若男女の魂が消える〔ような〕悲鳴。僕はもうぼうぜんとした。急いで屋根を持ち上げると、すでにもう死んだ人、手の折れた人、足の折れた人、あゝこの人たちも一瞬前までは働いていた人々ではないか。

これに加えて、竹屋町の方から火が出て豊岡の大半は焼き払われた。避難所を見れば親を失った子、子を失った親、見るも悲惨である。あゝ恨めしい悪魔の勝つてな振る舞いよ。

今回北但地方の都会、否、但馬第一の都会と誇った豊岡も、大自然の力にはどうしようもなく、彼らの振る舞いを許さない訳には行かなか

った。

しかしいつまでも彼らの振る舞いを許してはいてはならない。畑あつての芋種、命あつての物種である。我々は今回の震災によって丸裸となった。我々はぜひとも「新生の第一歩を踏み」をモットーとして、復興事業に活動すべきである。旧豊岡より大層大きな豊岡・城崎を建設すべきである。

これに加えて、豊岡地方の家はもう少し金を掛けて丈夫にすることや、地震に関する一般知識を向上させることなどである。

行動と日誌 志水 武三

一、午前11時10分、突如起こった北但の大地震とともに、校外に飛び出した。見る間に家は倒れ、至る所火事場となった。我々は一同運動場に集合し、直ちに救護に急いだ。我々寄宿舎生はわが家のことを心配しながら、徳田先生に従って豊田・中・宵田を境に北部を巡視した。その有り様は実に目も当てられなかった。巡視後寄宿舎前で1時間休み、その後直ちに中町の火事場に向かって突進し、家々の荷物を河岸に運んだ。午後8時過ぎ帰舎し、11時ころまで舎の周囲を警備し、11時過ぎ和魂寮前の広場に野宿した。

二、24日 起床4時、直ちに友だち4・5人と豊岡町を巡回し、焼け跡を見ながら昨日の大地震の有り様を眼前に描き出した。5時半帰舎、自分の飯を食い、舎監先生の命令によって博物室・物理化学実験室を整理した。その後、直ちに帰省したので、一まず安心し夜は野宿した。

25日 一昨日以来の疲労を回復するために、1日中野テント内に閉じこもり、1

日を過ごした。

26日 午前9時ころ登校、直ちに保証人宅を訪問し、午後先生の命によって学校内を掃除した。

27・28日 故郷で1日中野宿生活。

29日 初めてわが家で寝る。

30日 わが家で1日中過ごした。

31日 午後4時半のバスで直ちに帰舎し、夕食後豊岡町の地震跡を巡った。

感想と覚悟

志水武三

5月23日午前11時10分、突如北但馬地方に起こった恐ろしい大地震は、大火災を伴って但馬の中心地たる豊岡・城崎の両町を始め、他の部落をもわずかの間に焦土と化させた。これは単に但馬の損害のみではなく、実にわが帝国の損害である。今や当地方は我が国の津々浦々から、否世界の国々から同情的となった。この時に当たって、我々但馬の最高学府の生徒はどのような決意を持つべきであるかは、関東大震災の経験によって深く知る所である。

今回の大震災が起きるまで、全国的に知られていなかった豊岡中学校も、今日初めてわが国はもちろん、遠くは外国にも知れ渡ったのである。

現在、全但の我々最高学府の生徒には実に重大な任務が、アルプスの山のように目前に横たわっている。それは震災の豊岡ではなく、文化の豊岡市を造り出さなければならぬ〔とすることである〕。日本の大都市豊岡を造り出すは、実に但馬の我々中学生の双肩に掛かってる、と言わなければなるまい。

恐ろしかった大地震・大火災は、今ではもはや過去のことに過ぎない。昔の豊岡も本当に懐かしい。しかし今となっては、未来の大都市が待ち遠しくなって来た。

今回の震災において、我々豊中学生の働きに立派な点が多々あった。これらのことは地元住民並びに新聞記者らがよく認識したことであって、色々の新聞紙上にも記されている。このようにして天下に知れ渡った豊中も、今後の決心1つで名誉を維持して行くか、あるいは一変して不名誉を世間に伝えるか、2つのうちの1つである。

一昨年 of 関東大震災後、東都の2～3の学校では震災前までは相当校風も良かったのが、震災後非常に悪くなった例もある。わが校もこの思いがけない災難の時に直面して、関東の震災の苦い経験をよく吟味して、23日以後今日までの働きぶりを継続しなければならない。

いま線路上を走る列車には山ほど材木が積まれている。これも新豊岡市を建設する材料かと思うと、恐ろしかった大地震も夢から覚めたように消え去って、何となく歡喜の心がわいて来る。

神武山上では、懐かしい校舎を倒された惨めな小学生が幾千となく集まって、親切な先生の下にテントの中で教育を受けて、時々高声の唱歌が聞えるのもいじらしい。

町の至る所に「復興！復興！」と記されたバスターが掛かっていて、その前を通る被災者も悲しみなど顔に表わさず、元気よく復興に急いでいるのも嬉しい。

空を見上げると、震災当時の火をのろうかのような黒煙も今はもはや消えて、本当に我々を救ってくれるかのような青空と変わっている。幸いにも校舎だけは助かった我々豊中生諸君よ、願うことは今後大いに奮発して、今回の震災で救助して下さった全国の人々に、お礼の1つでも返したいものだ。（6月2日復興第1日目の授業に記す）

行 動 と 日 誌**信 部 鶴 雄**

一、頭痛がして少し熱があった。午前5時の朝食後、また寝て9時に覚め、身体の気分が良かったから、お宮に散歩に行った。お宮の庭で地震に遭い、驚き飛び下りてわが家に帰る。幸いにわが家はまず無事であった。

直ちに豊岡に来た。2度目の地震に遭って、大いに驚く間もなく火災が起こった。すぐ友人の所に行き、家財道具運びをした。煙に巻かれ、火にあおられて倒れそうになるまで働いた。自分ながら大仕事が出来たと喜んだ。家に帰った時は11時過ぎ、屋外に寝た。

二、24日以後毎日豊岡中学校、あるいは小学校や町の親類に来てお手伝いをした。城崎にも一度行った。家に帰るのはいつも午後8時前後であった。

三、児島(正)・村尾(道)・赤江・山田(彦)・谷垣正巳・奥村武夫、なお外に多くの舎生や自宅生が、真面目になって働いているのを見て感心した。

感 想 と 覚 悟**信 部 鶴 雄**

5月23日朝はどんより曇って蒸し暑く、いつ雨が降るか知れないという天気であった。その天気は何時まで続いて、11時過ぎとなった。村では食事の用意に忙しかった。あゝ地震が起こるなどとだれが思ったことだろう。

神ではない自分が知る理由もなく、静かな平和な村だった。急に大地震はこの地をわが物のように、地上のすべてのものを、海上の木の葉のように揺さぶり始めた。

人々はうろたえた。家の中から逃れようと急いでも足は進まず、食事の用意中のかまどが危険でならなかった。村は急にやかましくなった。幸いわが村は大したことはなかったが、所々に火事は起こった。しかし人々は他の者を振り返

ってみる暇はなかった。火は燃えるままに燃えた。

間もなく豊岡は大火に包まれた。消防の水は間に合わず、狂った火は何物も焼き尽くした。黒煙は天を覆い、火はますます暴れ狂った。翌日の午後になっても燃えていた。

焼け野原となった豊岡を見れば、おゝこれが豊岡であったか、どれが何町であるか全く分からない。哀れにもかかわらの欠け損じや電線のみが多く散らばっている。足に電線の絡むのもいじらしい。

どう考えても夢の中のことにしか思えない。本当にこれが豊岡か、目の前に見ても信じられない。焼けない所にしても〔家々が〕将棋倒しになっている。死人は多く出て来る。避難民は町から離れた空地に集まっている。

町には多くの消防隊員や警官や兵士たちが、道にいっぱいになっている。空には飛行機が見舞いに来ている。余震がしばしば襲い、人々を悩ませている。夢にも思わなかった。このようにただぼんやりと、活動写真でも見ているような気がする。そして関東の大震大火の有り様がほぼ想像される。今までは火災のみ考えて、地震の時のうろたえぶりは想像もしなかつた。

行 動 と 日 誌**杉 本 和 夫**

一、土曜の第4時限目、国語の時、にわかに激しい地震を感じ、前面の黒板は直ちに落下し、僕ら5人は逃げ遅れ、机の下において天井の落ちるのを今か今かと待っていたが、幸いに地震も止み、直ちに校門前に出た。

伊地知君とともに学校から帰り、家の安否を確かめ、直ちに妹を学校に探しに行く途中、桜湯付近において老婆の泣きながらの頼みにより、下敷きの人を掘り出しに掛かった。それが

城崎郡の被害のあらまし

（出典：『北但震災史』）

町村名	被災前 戸 数	震 災 戸 数										被災前 人 口	震災人口			
		家 屋					其 他 建 物						死 者	負 傷 者	行 方 不 明	計
		焼失	全壊	半壊	破損	計	焼失	全壊	半壊	破壊	計					
豊 岡 町	2,178	1,000	257	503	489	2,249	1,817	87	372	387	2,663	11,097	87	293	—	380
五 荘 村	677	—	56	20	421	497	—	22	3	5	30	3,293	5	9	—	14
田鶴野町	444	—	102	118	208	428	—	31	7	23	61	2,311	8	13	—	21
新 田 村	480	—	28	121	331	480	—	15	44	74	133	2,449	1	3	—	4
八 条 村	368	—	13	42	224	279	—	13	32	113	158	1,910	2	7	—	9
三 江 村	408	—	15	50	125	190	—	8	18	29						
港 村	742	148	369	170	96	783	45	236	136	220	637	4,434	33	243	—	276
中 筋 村	498	—	9	40	254	303	—	22	50	248	320	2,767	—	4	—	4
奈 佐 村	420	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2,231	1	1	—	2
城 崎 町	702	548	—	6	88	642	341	14	24	32	411	3,410	261	198	11	470

豊岡町の確定被害

（出典：『乙丑震災史』）

死 傷 者				被 災 家 屋					
死亡	重傷	軽傷	計	全焼	全壊	半焼	半壊	大破	計
88	139	157	384	1,031	257	33	236	268	1,775

ら所々を歩き、色々何かと手伝い、中井銅像付近に行くと、郵便局とおぼしき所より大きな火の手が上った。伊地知君とともに直ちに帰り、別れて僕の家を片付けに掛かった。

段々と火は近付いて来る。親類の家は危険である。父の命令により親類の家に至り、仏壇を出し、タンスの引き出しを持ち出し、船に積んで一安心、少し上〔の地区〕で中学生がポンプを運転している。僕も手伝った。火はますます近付く。今度はやぶの中の片付けに掛かり、それから片上・横田両先生宅〔に取り掛かったが〕、僕の家も危険になった。

稲垣君に手伝ってもらって僕の書籍機などを

蔵に入れ、電話、畳などを運び出し、一まず片付けた。はや家には火が付いた。神棚・仏壇がまだある。人々と〔ともに〕ついに川辺まで出した。〔家の〕出口は火煙でいっぱいだった。しかし安全に出した。僕らは直ちに立野に逃げた。僕の家は燃えている。

浦部先生に飯を頂き、大変にうれしかった。家族の者はどこを探しても出会わない。心細くなって来た。しかし幸いに知人に会い、居所を知り、直ちに行った。（10時頃）

家もなくなり、土蔵も焼き、丸裸となって寝る所もなく、立野の野原で野営して一夜を明かした。

二、24～26日 焼け跡の整理。

感想と覚悟

杉本和夫

昔より但馬地方は地盤が固くて、地震の安全地帯だと地震学者が言っていた。僕も実にその通りだろうと思っていた。しかしながら先月23日午前11時11分、突如として上下に震い左右に震え、家屋倒壊し、死者数百人、死者の比率は実に世界有数だそう。この安全地帯が震源地となり、震幅なども測候所建設以来初めての大揺れだそうだ。

このような地震があつて以来、以前は堅固だと言っていた学者も正反対に「第二期の……で地盤も軟らかで、いつかは地震の起こる機会を待っていたのだ」と言っている。こんな学者が集合しているわが国は、まだまだ地震学は発達しないと思う。

次に感ずることは、豊岡・城崎地方の道路の狭小であるのを拡張することである。豊岡はまだしも、城崎の道路の狭いのときたら話にならない。これが死人の多数に〔上ったことの〕原因であると思う。わが豊岡町の人々もこれに感じて、今道路の拡張に従事して盛んに測量している。本通り(中宵田・滋茂)を8間幅にするそうである。

こんな大震災により豊岡も灰燼^{じん}となり、多大の財産を失ったが、人々の心は復興の気分にあふれ、あちらからもこちらからも復興のノミの音が響いて来る。草も段々と焼け跡より芽を吹き出す。これらの草のように人々も段々と復興に努め、前の豊岡以上のグレート豊岡を建設すべきである。

行動と日誌

大字真雄

一、校長の訓辞が終り全校生徒が解散した時、直ちに帰宅の途につく。途中かなり激烈な余震

に遭遇し、自宅の安否を考えながら帰宅した。自宅の無事であることを喜び、なお余震があるだろうことを考慮して、外で2、3時間休息した。その間に立野方面と思われる辺りに、突然黒煙モウモウとして天を焦がすに至った。見る見るそれは広がり、じっとしていられず午後2時ころ軽装で駆け出した。

豊岡町に来て見れば、豊岡銀行の下の辺りが盛んに燃えつつあった。少しの間呼吸を整えて後、宵田町の前田先生の宅に赴き、他の生徒とともに家財運搬に従事した。これが終わってまず母校の校門の所に行き、直ちに荷車を引き出して鶴野・間狩両君とともに、校長宅の家財を本校まで運搬した。これを終了して後、午後10時ごろ帰宅した。この時まさに警察署に延焼しようとしていた。野宿して一夜を明かした。

二、24日 朝八時ころ豊岡に來り、焼け跡を巡視して後、同11時ころ帰宅し、野宿して25日を迎えた。

25日 登校し、午前中は避難者の旧住所・避難所・姓名を調査し、午後これを整理し本校および駅前に掲示した。本日も野宿。

26日 午前8時登校、12時半ころ人員点呼の後、5年生6、7名とともに小学校校庭に赴き、慰問品の配給の手伝いをした。

27日 午前8時ころ登校、正午まで校門の所におり、昼食後、飯を運搬し、午後5時ころ帰宅。

28日 午前9時ころ登校したが、用事がない様子なので直ちに帰宅した。

29日以後は自宅におり、養蚕の手伝いをした。

感想と覚悟

大字 真雄

今我々是不慮の大災に襲われて、感慨無量の思いがする。すなわち被災者が各方面からの救援によって、生きるのに第一に必要な飯をもらい受けることが甚だ多かったからである。

にもかかわらずそれを食べ尽くさず、ついには余分を捨てるというような憎むべきことをあえてする者がある。捨てなくとも他の良い方法はある。自分はこれを目撃して実に遺憾の極みであった。これだけでなく他の慰問品についても、そうである。

これらは各地の同情者が、一昨年に関東大震災当時の惨状を回想し、まさしく今回の大地震の被災者もあんな苦しみをなめているのであらうと想い、これほど多大の慰問品を贈ってくれたのであらう。この熱意を無にするようなことをするのは、まことに憂うべきであると思う。

同時にまた他面に〔おいて〕は今回の異変によって、人々の魂にいくらかの利益があったらうと想像される。従来、浮華放縦の気分によって墮落して来た人々が、この震災によって心を締められて、この憂うべき心情を洗い流されたかの感がある。しかしこれは別の方面から見れば、疑問点があるに外ならない。いずれにしても、現代やかましく言われている勤儉の風が奮い立たされるであらう。

前述の遺憾とする心情を放棄して勤儉をなし、多大の慰問品を寄贈された各位の同情心を察し、今後の最大急務である復興を急ぎ、この熱烈な同情の万分の一でも恩返しするために、大いに奮励努力しなければならない。これが我らの双肩にかかる目下の最大義務であり、我々は全力を尽くして大いに活躍、猛進すべきであると思う。

行動と日誌

武田 武

一、21日に左眼を手術してもらい、22日に続いて、23日も相変わらず病院通いをしようと午前10時40分ころ行き、11時5分ころ帰宅し、向かいの子供2人を連れて自分の部屋に行き、マニー〔小銭？〕をしまい、いざ遊ぼうとした時、ガタンガタンと恐るべきこの地震が来た。直ちに子供を親に引き渡した。

その後外出した時に、角の家及びその向かいの家が倒壊し、その家より出火したが、直ちに鎮火した。そうして火の手は郵便局に移ったとのことであつた。一まず角の家からの火が止まったので安心した。

午後2時過ぎから荷造りに着手し始めたが、うまく行かないのでとても困っていたところ、兄が帰宅して中学2・3年生の援助も頼むことになって働いていたところに、朝鮮人が6・7人くらい助けにきてくれた。朝鮮人の婆さんが教会の信者であるから心がけてくれたのだ。そこでまず電気会社裏に避難した。ところが雨模様のため、朝鮮人の親切によって、家具だけでも朝鮮人宅にでも入れてもらえばよいとのことで、朝鮮人宅横に避難し、そこで恐ろしい一夜を過ごした。

二、24日 朝・昼は無事で苦もなく過ぎ、夕方になった時、国語・漢文・武道の教師河本先生の宅に、ちょっとしたことから荷物とともに泊めてもらうことになり、その夜は先生宅で過ごした。

25日 朝9時の列車で江原郡芝〔現・日高町江原近辺か〕の泉田様宅に僕のみ避難。

27日 登校して、河本先生、村尾・山田とともに、5年生の生徒を訪問し、5時の汽車で江原に帰った。

30日 午後2時の汽車で豊岡に帰り、その日は河本先生宅に宿泊。

31日 教会の焼け跡で説教あり。昼より荷物を森方(京極通り)へ避難させた。

三、日ごろは余り評判の良くない本校の生徒が、割合に評判よく、一生懸命に僕らの苦しみをともに負ってくれたこと。弁当運び、その他親切をしたことによって、一般人にも良い感じを与えた。

感想と覚悟 武田 武

大正12年9月1日に関東を襲った震災が、地震の起こり難いわが但馬、殊に豊岡・城崎・津居山方面に地鳴りとともに襲来した。

この震災において非常に深く胸中に染み込んだことは、普段でも実行することが困難である「落ち着く」ということを、驚くほど見事に一般人が実行したということである。また思い切りのよいことなどにおいても、感動せずにはおられなくなった。

また用事のない一般の人々、殊にいつも余り評判の良くないこの中学校の生徒が、赤の他人といえども気持よく、一生懸命に手伝っているのを見る度に、本校の評判〔が高まり、〕後世にも模範として残るだろうと思い、つらつら私に「私事を以て公事を捨てず」という格言の尊さを覚えすにはおられない。

故に我々は、地震により得た上のこと、及びその他のことを努めて実行せねばならない。すなわち「善は成り難くして悪は成り易し」とある。人間は人間だけあって、どうしても聖人ではない限り大抵は悪道に進んで行きやすい。すなわち、悪道は広く大きく、アスファルト道路のように歩きやすい。また善道はこれに反し、狭く悪く小さい道であるから、大抵は誘惑の多い悪道に進む。しかし我々はこの誘惑に陥らず、

努めて上頂およびその他のことを実行すべきである。

行動と日誌

谷垣 完三郎

一、12時過ぎ、中竹野出身の学友5名とともに、運動場を出発して西に向かい、五荘を過ぎ、江野坂を越えて中竹野村の林地区に出て、それから竹野川に沿って下り、午後4時過ぎ自宅に帰った。

それから竹やぶに避難している母・兄弟に会い、避難小屋を建造した。晩は青年団員とともに夜警をした。

二、24日 朝、城崎町全滅と聞き、そこに親類があるため、握り飯などを持って見舞いに行った。未だ焼け跡の整理は出来ず。親類の所にしばらくいて午後帰宅した。晩は竹やぶの避難小屋に宿泊した。

25日 午前中、家の周囲および内部の一部分を掃除し、家に養蚕があったためその手伝いをした。午後、竹野の視察に行った。

26日 朝6時の列車で豊岡に着き、一応学校に来て、11時6分発の列車で帰宅。帰宅後、家の手伝いをした。

27日 本日朝再び城崎町へ食物・衣類などを持って行き、親類の焼けた家財の中で、まだ有用な物を拾い集めたりなどした。午後帰宅した。

28日 本日は1日中家の手伝いをした。

29日 朝、家の手伝いをし、午後新聞を読むなど休息した。

30日 朝、城崎へ家の使いで行った。午後、家の手伝いをした。

31日 朝、家の手伝いをし、午後書物の整理をした。

感想と覚悟

谷垣 完三郎

昔から地震は恐ろしいものの第一に数えられている。まことに地震はすべての天災中、その被害が最も大きく、また最も急速である。従ってその被害はまた最も惨憺^{さんたん}たるものである。

5月23日の第4限、静かに先生の講義を聞いていた時、突然大震動が起こった。その瞬間、人々の顔は青ざめ目は異様に光った。そして極めて少時間の内には、それが何であるかも想像が付かなかったくらいであった。

しかし直ちに前の黒板が落ちた。先生を始め我々は一斉に教室の入口に突進した。そして廊下・階段を走り降り、屋外に出た。「大地震だ!」、廊下を夢中に走りながら直感した。

外に出てみると、既に多数の人の唇の色が変わっており、地上には多数の亀裂^{きれつ}があった。グラグラと大震動が起こってから、地上の亀裂を見るまでの間は、ごく少時間であっただろう。しばらくして運動場に出た。向うの家が倒れ、近くの屋根が地に付いているのが見えた。間違いなく大地震が起こったのだ。

けが人を戸板に乗せて運動場にやって来る。小さい子供を両脇に抱えて走って来る。世の中にはわからにざわめき立ってきた。地震に伴って火災が起こった。その恐ろしい2つの災害のために、但馬の中心都会・豊岡の大部分は焦土と化し、天下の保養地・城崎温泉は全くの焼け野原となった。その他、漁業地・港村も全滅した。そして人命を失い、また傷ついた被害は甚大である。

僕は地震が突発するや、5、6人の友人と直ちに山坂を越えて故郷へ帰った。故に豊岡町・城崎町の焼失する様子は知らない。しかし3日経て城崎町を見た時、4日目に豊岡町を見た時、半焼けの家さえない、所々に赤く焦げた木ばか

り立っている城崎を見た。あの奇麗だった豊岡の町が、すっかり焼けたかわらと土とになってしまったのを見た。地震の害はこんなに激烈なのかと、今更〔ながら〕驚かざるを得なかった。

しかし天下の同情はますます深く、殊に先年同じ災害に出遭った東京方面の同情は、実に誠意のこもったものである。

1週間後の今日、城崎・豊岡町を見ると、焦土の中に黒く動いて、一生懸命に復興に急いでいる人が見える。誠にうれしい。ほのかに聞けば、豊岡町も今度道路の拡張など大いに整理されるそうである。何事も過去の悪かったことはあまり考えぬがよい。我々はこの大災害を都市発達のよい機会と思って、ますます復興、否一層発達させなければならない。

行動と日誌

谷垣 正巳

一、午前、帰宅後直ちに登校。午後、昼食を食わず火事場に臨み^{のぞ}、郵便局近辺の家の調度品を1時間運搬した。その後約2時間消防に従事し、また荷物の運搬をした。夕食はパンで済ませた。夜は寄宿舎に泊まった。

二、24・25日 朝から中学校の案内係の仕事に従事した。この日から飯は中学校で食い、寄宿舎に泊まった。

26日 案内係および夕食の運搬。

27～30日 小学校の配給係の仕事に従事、営繕課に赴いた。

31日 午前中営繕課、午後城崎の同級生慰問に出動。

三、個人について特に感動すべきことなし。

感想と覚悟

谷垣 正巳

震災当時我々は、郵便局の火事場に駆け付けたが、その時自転車に乗った人が、「確かなこ

とだ」と言いながら、「午後2時半にまた大地震が来る」と通報していた。震災におびえた僕らは、どれほど心底から恐れたことだろう。

郵便局付近の荷物を持ち出しながら、どうにかして2時半には公園に避難したいと考えた。しかし避難者の頼む声を振り切って、どうして自分のみ避難できようか。僕らの仲間の6人は1人減り2人減りして、ついに僕と赤江君の2人のみになった。先の通報におびえ切った僕の心は、何とかして逃れたいと考えた。

ついに思い切ってこのことを赤江君に相談した。しかしこの時僕の心に深く感動すべき事柄が起こった。赤江君は決然として僕の言葉を退けたのであった。「何だ、そんなことは恐れるに及ばない、それよりも哀れな人々を救助しよう」と。僕の心はむち打たれた。〔弱きを助けようという〕義侠心ぎきょうしんが頭をもたげた。今までの心は良心に圧倒されて、僕は死に物狂いで働いた。

炎は遠慮なく家々をなめて我々の方に迫ってきた。家財道具を運び終った僕らは、郵便局の前を通過して川岸に出た。消防はほとんど疲労困憊はうしてポンプの水力は衰えた。火の手は早くも間近に迫った。

我々は講習生・中学生の一団に加わって消防に従事した。腕はしびれる、体は思うままにならず、最初いた消防夫は次第に減って、我らは先生の監督の下に働いた。火は既にポンプの前を過ぎた。消防の頭らしい人があちらでやれと言う。僕たちは川に沿って南へポンプを運んだ。

もちろんこの時は消防夫は1人もいなかった。

連絡の取れない消防は駄目だ。僕らが消防頭の言によってあっちこっち走り回っている間に、火は滋茂町をなめ尽くし、中町の半ばは焼け落ちた。

僕らはこの能率の上らない仕事を放って、疲労に倒れんばかりの体にむち打って、更に荷物運びに従事した。この時、僕らは消防夫の無能をどれほど悲しく思っただろう。また意気地の無いのを憤っただろう。また人々が〔消防に〕いかに頼るべきでないと感じただろう。いたずらに必要なポンプを無用にし、かつ働くべき我々の力を無駄に使用したことを嘆いた。

私も講習生・中学生たちが働いているのに、運動部の選手である自分が退くのは恥だ、という心に帰りたい心を打ち消されて、更に勇気を鼓舞して東西に走った。僕はこの間、未来の文学者を気取った某君が、ブラブラ歩いているのを見た。当世のふがいなさを日ごろ嘆いている某君が、小さい荷物だけを持ちながら、フラフラ歩いているのを見た。

そこで汗みどろになっている諸君を見れば、柔道部・剣道部・競技部・庭球部・野球部などの運動部の選手が多いのを見て、ますます体育の必要を痛切に感じた。日ごろ先生を非難したり、三文さんもん〔＝何の役にも立たない〕文学をひねる連中が、火事場見物気分でノソノソ歩いているのを見て、ムラムラと心が沸き立った。夕方学校に行って、運動場に出てみたこともない勉強家の某君が、「休みが長くなればよい。臨時試験がどうなるか」などと話しているのを見て、何のため勉強するのだろうと驚いたのである。

Students Who Participated in Relief Activities after a Disastrous Earthquake (Part3)
:Discovery of a Collection of Essays on the Hokutan-Earthquake of 1925
by Students of Toyooka Middle School

Jun'ichi FUKAI *

Hideki KISHIDA **

Abstract: This paper is the third part of the introduction of essays on the Hokutan-Earthquake by students of Toyooka Middle School. This serial introduction will make the following two contributions:

provide information on earthquake damage, earthquake relief activities, and restoration of small-and medium-sized communities, for the purpose of comparative analysis, such as with the Hanshin-Awaji Earthquake;

aid studies on adolescent voluntary relief activities, including rescuing people in disasters.

key words: Hokutan-Earthquake, Relief Activities, essays by students of Toyooka Middle School, map of damaged Toyooka-town, damage list of Kinosaki-district (including Toyooka-cho)

* Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

** Part-time Lecturer in Ritsumeikan University